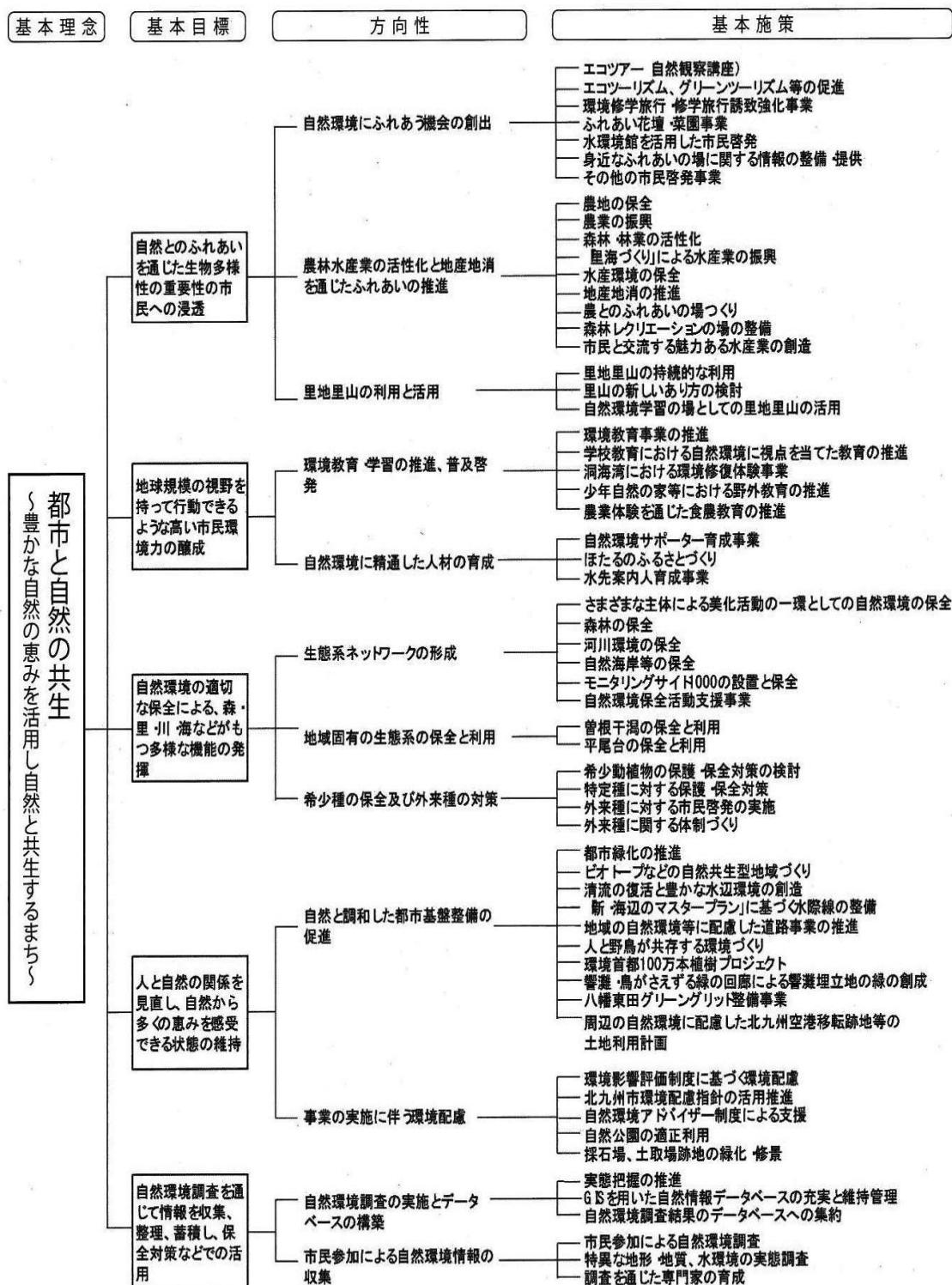


第2次 北九州市生物多様性戦略進捗報告（令和4年度実績）について

1 戦略の全体像（体系図）

2015年度からの10年間を期間とした本戦略は、「都市と自然の共生」を基本理念とし、5つの基本目標を定め、基本目標ごとに方向性、基本施策を掲げている。



2 戦略の推進に向けた数値目標

基本目標1 自然とのふれあいを通じた生物多様性の重要性の市民への浸透

番号	項目	単位	目標値(年度)
1	本市が取り組む環境学習プログラムとしてのエコツアー参加人数	人	6,500 (2020)
2	響灘ビオトープのガイドツアー参加人数	人	4,000 (2020)
3	自然環境体感ツアーの参加人数	人	500 (2019 累計)

基本目標2 地球規模の視野を持って行動できるような高い市民環境力の醸成

番号	項目	単位	目標値(年度)
1	小学生の環境体験科における響灘ビオトープ活用数	校	25 (2024)
2	響灘ビオトープのガイドツアー参加人数【再掲】	人	4,000 (2020)

基本目標3 自然環境の適切な保全による、森・里・川・海などがもつ多様な機能の発揮

番号	項目	単位	目標値(年度)
1	自然環境保全に取り組む団体への支援件数	件	10 (2024)
2	「北九州市自然環境保全ネットワークの会」参加団体等が開催する自然環境保全活動参加者数	人	約 2,000 (2024)

基本目標4 人と自然の関係を見直し、自然から多くの恵みを感じることができる状態の維持

番号	項目	単位	目標値(年度)
1	環境首都 100 万本植樹プロジェクトによる植樹本数	本	1,000,000 (2024 累計)
2	市街地(市街化区域)の緑の確保	%	9.5 (2020 累計)

基本目標5 自然環境調査を通じて情報を収集、整理、蓄積し、保全対策などでの活用

番号	項目	単位	目標値(年度)
1	ベッコウトンボ市民調査実施回数	回	3 (2020)
2	曾根干潟における生物調査の実施	回	4 (2020)

3 補助的な指標による評価について（平成30年度～令和4年度市民意識調査から）

毎年実施されている市政評価において、生物多様性戦略に特に関係の深い市の政策（「自然環境の保全と自然とのふれあいの推進」、「公園の整備など、緑のまちづくりの推進」）の令和4年度の評価は、全34項目中33位と5位となった。

「緑のまちづくり」については市民から既に高い評価が得られている一方で、「自然環境保全や自然とのふれあい」については、他の環境分野と比べると高い評価を得られておらず、今後も更なる取組の推進が必要である。

（表）市政評価の経年変化（評価）抜粋

調査項目	（順位）と平均スコア※		
	R4	R3	R2
15 公園の整備など、緑のまちづくりの推進	(5).339	(4).420	(5).465
30 ごみの適正処理とリサイクル	(4).394	(3).568	(2).560
31 大気・騒音・水質などの環境保全	(15).101	(12).162	(11).168
32 地球温暖化対策、省エネ、再生可能エネルギーの推進	(16).089	(15).099	(15).089
33 自然環境の保全と自然とのふれあいの推進	(33).026	(27).042	(32).025

※平均スコア：全34項目のなかで「以前に比べてかなりよくなっている」と思われるものを1位から3位まで回答を求め、1位3点、2位2点、3位1点を合計し、回答者数で割ったもの。

SDGsの観点からの評価

○環境基本計画（環境首都・SDGs実現計画）から見た生物多様性戦略とSDGsの関係性

環境基本計画（副題：環境首都・SDGs実現計画）においては、第2次生物多様性戦略の内容も盛り込み、SDGsの17のゴールとの関係性を整理した上で、環境政策の観点からSDGsの実現を図っている。

環境基本計画と第2次生物多様性戦略、及び関連するSDGsを整理すると、次頁（図）のとおりである。環境基本計画及び生物多様性戦略の進捗点検を連携して実施し、生物多様性戦略の基本施策ごとに、推進が可能なSDGsのゴールを整理している。

(図) 生物多様性戦略と環境基本計画、SDGs について



4 5つの基本目標ごとの進捗状況（令和4年度）



基本目標1 自然とのふれあいを通じた生物多様性の重要性の市民への浸透

（1）数値目標の進捗状況

	項目	目標値 (年度)	2022 (R4)	2021 (R3)	2020 (R2)
1	本市が取り組む環境学習プログラムとしてのエコツアー参加人数	6,500人 (2020)	2,698	1,512	895
2	響灘ビオトープのガイドツアー参加人数	4,000人 (2020)	5,498	2,704	2,432
3	自然環境体感ツアーの参加人数	500人 (2019累計)	879	790	642

（2）方向性ごとの主な施策の進捗状況

方向性1 自然環境にふれあう機会の創出（施策数：7）

- ・「エコツアー（自然環境講座）」については、響灘ビオトープを活動の場としたガイドツアーや、北九州市自然環境保全ネットワークの会の協力のもと「カブトガニ産卵観察ツアー」や「平尾台ツアー」を開催し、市内の豊かな自然とふれあう機会を提供した。
- ・「エコツーリズム、グリーンツーリズム等の促進」では、HP・SNSを活用した情報発信のほか、エコツアーをより充実したものにするための冊子「エコツアーガイドブック」の配布を行った。
- ・「ふれあい花壇・菜園事業」では、未利用市有地及び公園で35件の活用があった。

方向性2 農林水産業の活性化と地産地消を通じたふれあいの推進（施策数：9）

- ・「森林・林業の活性化」では、私有地の荒廃した森林の整備（89.04ha）を行った。
- ・「水産環境の保全」では、漁業者等が藻場等の環境保全活動（食害生物（ウニ類）の駆除等）を5地区で行った。
- ・「地産地消の推進」では、「地元いちばん」HPやSNSを通じて、市内産食材のPRを積極的に行った。

方向性3 里地里山の利用と活用（施策数：3）

- ・「里山の新しいあり方の検討」では、竹林の維持管理のため、34tの竹が搬出されたほか、竹粉碎機の貸出件数は23件となった。

（3）環境局による基本目標1の進捗状況評価

- ・基本目標1に掲げている19の基本施策は、全て取り組まれている。
- ・数値目標3項目のうち2項目の達成であったが、施策全体としては目標の達成に向けて進捗している。



基本目標 2 地球規模の視野を持って行動できるような高い市民環境力の醸成

(1) 数値目標の進捗状況

	項目	目標値 (年度)	2022 (R4)	2021 (R3)	2020 (R2)
1	小学生の環境体験科における響灘 ビオトープ活用数	25 校 (2024)	25	4	6
2	響灘ビオトープのガイドツアー 参加人数【再掲】	4,000 人 (2020)	5,498	2,704	2,432

(2) 方向性ごとの主な施策の進捗状況

方向性 1 環境教育・学習の推進、普及啓発（施策数：5）

- ・「環境学習事業の推進」では、環境首都検定の受験者数が 5,751 人となり昨年度に引き続き目標値を上回ったほか、日頃の環境活動の発表の場であるエコライフステージが開催され、昨年度を上回る 90.9 万人の参加があった。
- ・「学校教育における自然環境に視点を当てた教育の推進」では、小学校第 4 学年を対象にした「SDGs 環境アクティブ・ラーニング」を 107 校で実施した。
- ・少年自然の家（もじ、かぐめよし）や玄海青年の家等の青少年施設では、計 85,167 人の利用があり、周辺の自然環境を活かした野外体験活動等の主催事業を実施した。
- ・「農業体験を通じた食農教育の推進」では、小学校への児童や先生を対象にした食や農業の出前授業や体験活動を小学校 11 校 703 人に対して行った。

方向性 2 自然環境に精通した人材の育成（施策数：3）

- ・「自然環境サポーター育成事業」では、自然環境に関連した講座やフィールドワークを通じて育成された自然環境サポーターが、平尾台ツアーの運営補助や響灘ビオトープでの希少種の保全活動を行っている。

(3) 環境局による基本目標 2 の進捗状況評価

- ・基本目標 2 に掲げている 8 の基本施策は、ほぼ全て取り組まれている。
- ・数値目標 2 項目を全て達成しており、施策全体として順調に進捗している。



基本目標 3 自然環境の適切な保全による、森・里・川・海などがもつ多様な機能の発揮

(1) 数値目標の進捗状況

	項目	目標値 (年度)	2022 (R4)	2021 (R3)	2020 (R2)
1	自然環境保全に取り組む団体への支援件数	10 件 (2024)	9	9	9
2	「北九州市自然環境保全ネットワークの会」参加団体等が開催する自然環境保全活動参加者数	約 2,000 人 (2024)	約 2,100	約 2,500	約 2,000

(2) 方向性ごとの主な施策の進捗状況

方向性 1 生態系ネットワークの形成（施策数：6）

- ・「さまざまな主体による美化活動の一環としての自然環境の保全」では、「市民いっせいまち美化の日」を定め、9月から10月の期間中、市民による地域の道路、公園、河川、海浜等のいっせい清掃を実施し、まち美化ボランティアとして57,647人が参加した。
- ・「自然環境保全活動支援事業」では、本市の自然環境が守り育まれるよう、環境保全活動や普及啓発活動に取り組む団体9件について支援を行った。

方向性 2 地域固有の生態系の保全と利用（施策数：2）

- ・「曾根干潟の保全と利用」では、環境省のモニタリングサイト1000のほか、市による曾根干潟での環境調査（鳥類調査、底生動物調査、底質調査）を実施し、情報を蓄積した。
- ・「平尾台の保全と利用」では、天然記念物「平尾台」の保護のため、指定地域内にある個人所有地の買い上げをすすめており、令和4年度までに53.73%の公有地化を行った。

方向性 3 希少種の保全及び外来種の対策（施策数：4）

- ・「外来種に対する市民啓発の実施」では、ヒアリ・アカカミアリの防除の状況やアカミミガメ及びアメリカザリガニの条件付特定外来生物の指定について、市広報誌等で周知を行った。
- ・「外来種に対する体制づくり」では、環境省や福岡県と連携してヒアリやツマアカスズメバチ等の特定外来生物のモニタリング調査を継続して実施した。

(3) 環境局による基本目標3の進捗状況評価

- ・基本目標3に掲げている12の基本施策は、全て取り組まれている。
- ・数値目標2項目のうち1項目の達成であったが、施策全体としては目標の達成に向けて進捗している。



基本目標 4 人と自然の関係を見直し、自然から多くの恵みを感じることができる状態の維持

(1) 数値目標の進捗状況

	項目	目標値 (年度)	2022 (R4)	2021 (R3)	2020 (R2)
1	環境首都 100 万本植樹プロジェクトによる植樹本数	1,000,000 本 (2024 累計)	784,926	750,233	739,033
2	市街地（市街化区域）の緑の確保	9.5% (2020 累計)	8.5	8.4	8.4

(2) 方向性ごとの主な施策の進捗状況

方向性 1 自然と調和した都市基盤整備の促進（施策数：10）

- ・「環境首都 100 万本植樹プロジェクト」では、「みんなで植えれば 100 万本」を合言葉に、15 年で 100 万本を目標として、市民・NPO・行政など様々な主体が市内各地で植樹を実施しており、令和 4 年度までの累計植樹本数は 784,926 本となっている。

方向性 2 事業の実施に伴う環境配慮（施策数：5）

- ・「環境影響評価制度に基づく環境配慮」では、環境影響評価法及び北九州市環境影響評価条例に基づき事業者が行う環境影響評価にあたり、環境影響評価審査会を開催し、環境保全の見地から適切な意見の提出を行っている。令和 4 年度は、環境影響評価審査会を 3 回開催し、環境保全の見地から配慮書 1 件、方法書 1 件、準備書 1 件について、答申を受けた。
- ・「北九州市環境配慮指針の活用推進」では、本市の公共事業を対象に、自主的な環境配慮を促す「環境配慮点検制度」の運営等を行っており、令和 4 年度は、54 件の公共事業について点検を実施した。

(3) 環境局による基本目標 4 の進捗状況評価

- ・基本目標 4 に掲げている 15 の基本施策は、ほぼ全て取り組まれている。
- ・数値目標 2 項目のうち達成した項目はなかったが、施策全体としては目標の達成に向けて進捗している。



基本目標5 自然環境調査を通じて情報を収集、整理、蓄積し、保全対策などでの活用

(1) 数値目標の進捗状況

	項目	目標値 (年度)	2022 (R4)	2021 (R3)	2020 (R2)
1	ベッコウトンボ市民調査実施回数	3回 (2020)	7	1	0
2	曾根干潟における生物調査の実施	4回 (2020)	8	8	8

(2) 方向性ごとの主な施策の進捗状況

方向性1 自然環境調査の実施とデータベースの構築（施策数：3）

- ・「実態把握の推進」では、市による曾根干潟での環境調査（鳥類調査、底生動物調査、底質調査）、環境省のモニタリングサイト1000での調査（年3回）を実施。蓄積したデータについては市民参加型の保全活動やツアー型学習会など、保全対策及び魅力発信に活用している。
- ・「GISを用いた自然情報データベースの充実と維持管理」では、動植物分布情報を一元的・効率的に管理するため、「自然環境情報GISデータベース」を市内GISポータルサイトで運用し、公共事業での活用を推進している。

方向性2 市民参加による自然環境情報の収集（施策数：3）

- ・「市民参加による自然環境調査の実施」では、ベッコウトンボの市民参加調査を7回実施した。
- ・「特異な地形・地質、水環境の実態調査」では、本市の代表的な自然環境拠点である曾根干潟などの自然環境の特徴や現況、市内の希少種の生息状況を把握・整理を行った。

(3) 環境局による基本目標5の進捗状況評価

- ・基本目標5に掲げている6の基本施策は、ほぼ全て取り組まれている。
- ・数値目標2項目を全て達成しており、施策全体として順調に進捗している。

総合評価

- ・本戦略に掲げている基本目標の達成に向けた 60 の基本施策は、ほぼ全て取り組まれている。
- ・市民参加型施策への新型コロナウイルス感染症の影響が少なくなり、概ね順調に目標値に向かって進捗している。

⇒今後も、本戦略の目標の実現のため、市民やNPOなどの各種団体、事業者、行政が連携しながら取組を推進していく必要がある。

SDGsのゴール		本戦略 基本施策との関わり	施策数
	2 飢餓をゼロに	農林水産業の推進による持続可能な食糧生産システム確保など	1
	3 すべての人に健康と福祉を	様々な主体による植樹の実施や環境に配慮した開発事業の実施など	6
	4 質の高い教育をみんなに	自然環境学習を通じたESDの推進など	20
	6 安全な水とトイレを世界中に	水に関連する生態系の保護・回復など	12
	7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに	バイオマス資源などの再生可能エネルギーの積極活用など	4
	8 働きがいも経済成長も	自然の観光資源としての活用や様々な生態系サービスの提供など	8
	9 産業と技術革新の基盤をつくろう	生態系を利用した防災・減災の推進による持続可能で強靱なインフラ整備など	14
	11 住み続けられるまちづくりを	都市緑化の推進や生態系を利用した防災・減災など	19
	12 つくる責任つかう責任	バイオマス資源などの再生可能資源の積極活用など	9
	13 気候変動に具体的な対策を	森林の適正管理による森林吸収源、バイオマス資源の積極活用など	11
	14 海の豊かさを守ろう	海洋及び沿岸の生態系保全、資源回復に向けた取組など	34
	15 陸の豊かさを守ろう	森林の適正管理や生態系の場の保全、希少種の保護、外来種対策、環境アセスメントの推進など	45
	17 パートナリシップで目標を達成しよう	団体や企業、自治会等との協働による自然環境保全活動の実施など	10

5 本戦略と主なSDGsのゴールの関係

「14. 海の豊かさを守ろう」(34 施策)

例) エコツアーの実施、自然環境保全活動支援事業、曾根干潟の保全と利用、水環境館での市民啓発 等

「15. 陸の豊かさを守ろう」(45 施策)

例) エコツアーの実施、自然環境保全活動支援事業、地産地消の推進、都市緑化の推進 等 ※28 施策がゴール 14・15 の両方に関与

⇒生物多様性（陸・海の生態系）の保全に貢献している

「4. 質の高い教育をみんなに」(20 施策)

例) 各学習施設の運営、SDGs 環境アクティブ・ラーニング、SDGs 修学旅行 等

「11. 住み続けられるまちづくりを」(19 施策)

例) 鳥がさえずる緑の回廊創成事業、北九州市環境配慮指針の活用 等

⇒本戦略における都市緑化や環境学習等の取組がまちづくりや教育にも貢献している

6 今後の取組について

<本市生物多様性戦略の改訂>

現戦略期間は、平成27年度から令和6年度までであるため、令和5年度は事前に現況調査を実施し、令和6年度からは、国の動向をふまえ、本格的な改訂の検討を行う。

<自然共生サイト認定を推進>

新国家戦略で掲げられた2030年ミッション「ネイチャーポジティブ(自然再興)^{※1}」の実現、「30by30目標^{※2}」の達成に向け、市域内の「自然共生サイト^{※3}」認定を推進する。

※1:自然を回復軌道に乗せるため、生物多様性の損失を止め、反転させること

※2:2030年までに陸と海の30%以上の保全を目指すもの

※3:民間の取組等により生物多様性の保全が図られている区域として、国が認定する認定する新たな取組。保護地域との重複を除外した地域が「OECM^{※4}」として、国際データベースに登録される。

※4:Other effective area-based conservation measuresの略

国立公園等の法令による保護地域以外で、生物多様性保全に資する地域のこと

【県内で唯一!!】

響灘ビオトープが国の『自然共生サイト』に認定！

～生物多様性の保全貢献区域として認められました～

「自然共生サイト」とは、COP15で世界目標として定められた「30by30」(※1)の達成を図るため、国(環境省)が、民間の取組等により生物多様性の保全が図られている区域を認定するもので、令和5年4月から始まった取組です。今回、第1回目の認定として、全国で122箇所、九州で12箇所が認定されており、福岡県内では響灘ビオトープが唯一の認定となります。認定地はOECM(※2)として国際データベースに登録されることとなります。

響灘ビオトープ(若松区)には、ベッコウトンボ(昆虫類)やチュウヒ(鳥類)などの数多くの生物が生息し、自然とのふれあいや生物多様性の保全を進める拠点となっており、今回の内定により、世界目標の達成についても、貢献していくこととなります。

＜響灘ビオトープの生物多様性の価値について＞

- 自然環境学習拠点として機能し、800種もの多様な動植物からなる健全な生態系が存在している
- チュウヒやベッコウトンボ等の絶滅危惧種が生息生育している
- 環境省の「生物多様性の観点から重要度の高い湿地」に選定されるなど、生物多様性保全上の重要性が認められている



ベッコウトンボ
環境省レッドリスト
絶滅危惧 IA 類



チュウヒ
環境省レッドリスト
絶滅危惧 IB 類

※1：世界目標(30by30(サーティバ イサーティ) 目標)

生物多様性条約第15回締約国会議(COP15)で採択された「昆明・モントリオール生物多様性枠組」や、「生物多様性国家戦略2023-2030」で盛り込まれた目標で、2030年までに陸域と海域の30%以上の保全を目指すもの。

※2：OECM(Other effective area-based conservation measures)

国立公園等の法令による保護地域以外で、生物多様性保全に資する地域のこと。企業の森、ビオトープ、里地里山等、多様な場所が該当する可能性がある。OECMとして国際データベースに登録されると30by30目標達成に直接貢献することができる。



響灘ビオトープ

響灘ビオトープ公式マスコットキャラクター



ベっち



ひびちゅ